

肥前陶磁の源流

今、生産技術の視点からどこまで追えるのか

The Origin of Hizen Ware: to What Extent
We can Trace It Back from the Standpoint of Production Technology

村上伸之

はじめに

- ①技術区分・時期区分の捉え方
- ②岸岳山麓の窯業の技術的位置付け
- ③近世窯業の源流と成立時期

おわりに

【論文要旨】

肥前の近世窯業は、当時としては卓越した技術力を背景として、わずか数十年あまりの間に、既存の大生産地と肩を並べるまでに急成長した。これは日本の窯業史上でも一つの画期として位置付けられ、近世窯業を印象付ける登り窯や磁器生産など、この新しい窯業の産物が手本となり、国内窯業の活性化が図られた。ところが、肥前にはその母体となった既存の窯業は存在しておらず、海外で完成した技術をセットとして導入することによって成立した。その源流となる技術については、従来から文禄・慶長の役（1592～98）の際に朝鮮半島からもたらされたことは明らかになっているが、これは窯業発展の礎であり成立の礎ではなかった。この成立の礎となった窯業についても、古くから北朝鮮地域にその源流があり、最初岸岳山麓に定着したと漠然と考えられてきたが、現状では、説明は遅々として進んでいない。そこで、主として製品の類似性の比較に終始した従来の方法を離れ、生産技術的な視点から、現在の資料でその源流にどこまで追えるのか考えてみることにした。まずは、現在、ごく普遍的に用いられている技術系統分類と時期区分を取り上げ、その捉え方を通して生産技術の性質を再確認し、それをもとに肥前における岸岳山麓の窯業の技術的位置付けを、主として窯体構造や窯詰め技法などから追ってみた。その結果、肥前の窯体構造は3種類に大別され、岸岳山麓では独特な割竹式登り窯が用いられていること、ほかの地域と異なった窯詰め技法が定着しており、それらも基本的には朝鮮半島の技術が導入された可能性が高いことを指摘した。次にそれらを踏まえ、北朝鮮地域の採集品と比較することによってその技術的類似性を明らかにし、大阪市の出土資料などとの比較によって、現状では、成立年代は1580年代後半～1590年前後の可能性が高いことを示した。